

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

節電の夏に桂キャンパスを訪問して

関西支部長

丹羽 彰(昭48年卒)



大学を卒業して約40年。思いもよらず洛友会関西支部長という栄誉に預かりました。卒業後は殆ど大学に足を運んでいなかった私ですが、桂キャンパスができたことや、大学法人化等の数々の改革が行われたことは会報で見かけたことがありました。そこで、この機会に一度桂キャンパスを見学したいと思いたち、洛友会事務局長で情報学研究科の高橋先生にお願いしましたところ、快く引き受けていただきました。

桂キャンパスは、私の住む奈良

市からは交通の便が悪いというイメージが強かったのですが、京都駅から路線バスに乗ると30分あまりで到着いたしました。訪問した日は8月の終りの蒸し暑い日でしたが、10時過ぎから12時過ぎまで、前事務局長で工学研究科の鈴木先生にキャンパスの紹介と案内をしていただきました。

桂キャンパスには、大学院のうち、工学研究科と情報学研究科が移転することになっており、現在は工学研究科のうち電気・電子専攻を含む大部分がすでに移転しています。先生方はすべて大学院所属となっているため、学部での講義があるときは片道1時間弱をかけて吉田キャンパスまで移動しなければならず、また、学部の学生も卒業研究は桂キャンパスで行っているということでした。キャンパスは丘陵地の斜面上に

あり、建物の複数階からの出入りが出来るほか、建物と建物の間には十分な空間が確保されています。電気専攻建物の図書室に入室したところ、そこには多くの書籍のほか、製本された手書きのノートが並んでいました。これらは大先輩からの寄贈によるもので、ノートを開いてみると、丁寧にびっしりと書かれた数式や、外国語の記述があり、本当に熱心な学ばれたのだと感激しました。私も学生時代に怠けず勉学に打ち込んでいれば、また違った道もあったのかなと思つたところです。

キャンパス周辺は静かで、繁華街はもとより一般の商店もほとんど見当たらないようで、研究にはうってつけではありますが、夜になると食事はどうするのかと余計な心配をしてしまいました。最近では構内全域が禁煙という大学もあるようですが、ここでは喫煙スペースが所々に設けてあり、愛煙家にも優しい配慮がしてあります。

昼食は鈴木先生にご一緒していただき、学生食堂に参りましたが、昔とはメニューも支払方法も大きく変わっており少々戸惑いました。夏休み中とはいえ、学生さんが相人数食事を取っておられ、付近にお住まいの一般の方も家族連れでこられるとお聞きしま

した。

会員の皆様も興味をもたれた方は、一度桂キャンパスを散策してみられてはいかがでしょうか。本年12月8日には桂キャンパスで企業交流会が計画されていますので、それに合わせて訪れるのも一案かと思えます。

せっかくの機会でしたので桂からは吉田キャンパスまで無料のシャトルバスに乗りました。いつも通勤で利用している電車と違い、冷房も心地よく効いていました。

今年の夏は節電運動が昨年よりも浸透し、事業所だけでなく家庭でも冷房の設定温度を高くしたり、照明を減灯したり、種々の対応により、関西地区では電力使用量が一昨年に比較して10パーセント以上の削減効果があったようです。原子力発電所の大部分が停止していたものの、その他の発電所がフル稼働して大きなトラブルもなく、大停電や計画停電もなく乗り切れたところです。地域ぐるみで省エネ運動をしていくことは重要で、今後も続けていくべきですが、家庭でも、事業所でも相当の我慢を強いられた事象もあり、この状況が何年も続くことは避けなければならぬと思います。

振り返れば、昨年3月の東日本大震災による福島第1原発の事故

が起こってしばらくは、遠く離れた関西地区にいる私たちでも、日本がどうなるのかという得体の知れない恐怖感に包まれました。電力会社をはじめとする関係機関の方々が身をなげうって事故拡大防止に尽力された結果、現在のところ放射能の影響による人体への大きな影響は出ていないと聞いています。現場で誇りと勇気を持つて対応作業にあたってくださいました方々には本当に頭が下がります。有難うございました。

一方、昨今では原発をゼロにし、自然エネルギーによる発電に切り替えようという機運が盛り上がっています。将来のエネルギー施策としては、化石燃料の枯渇が間違った訪れ、原発においては半永久的に核燃料を使用するための高速増殖炉の実用化のめどが立たない中、自然エネルギーによる発電技術や電力貯蔵技術についても併行して研究・開発の必要があるでしょう。しかし、原発における安全対策のレベルを上げて今回のような事故を防ぐことは、決して不可能ではないと信じています。

私は、長い間鉄道の保安システムの業務に従事してきましたが、鉄道においては過去の事故の教訓に学び、安全対策のレベルアップを図ってまいりました。原発事故は、はるかに影響が大きいので比

べ物にはならないかとは思いますが、原発に精通した方々に加え、多方面の技術者の知恵と経験を生かした安全対策を講じた上で、再稼働をして、生活、産業、経済活動に支障のない安定した電力供給を実施していただくことを願っています。

本部だより

「名簿の電子化」について

平成24年度の本部総会で「名簿の電子化」に取り組みとお知らせしました。その目的と進捗状況をご説明します。

会員名簿は、これまで、特別発注のデータベースシステムで管理して来ました。葉書で送られる住所などの会員情報をデータベースに登録したり、会費納入の都度データベースに記録するなどの作業を手で行って来ました。使

の計画です。詳細な内容は、平成25年4月の会報でお知らせしますが、本稿ではその目的と概要を述べます。

WEB名簿の目的は、①会員がパソコンを使って自由に名簿を検索できる、②事務局作業を効率化する、の2つの点です。会員情報の検索は、名前のほか、住所、支部、所属機関、卒業年次など、さまざまな形で行うことができま

入のついでに、ご寄付をいただくこともできるようになります。

事務局は、会員情報の入力や、会費納入状況の登録などの作業が軽減されます。また、印刷された名簿の発行やイベント参加に際しての、お申し込みの集約・発送などの処理も自動化が進むと期待されます。事務局や支部からは、WEB名簿に掲載されたメールアドレスに同報メールを使ってさまざまなお知らせを簡単にお届けできるようにになります。例えば、会合の案内、技術誌cue洛友会報の発行案内などです。

名簿に合わせて、洛友会ホームページも更新する予定です。ブログを使って、情報発信(ページ作成)が簡単にできるようにする予定です。メールで簡単な記事と写真を送っていただければホームページが作れるようになります。ご要望があれば、支部ページや卒業年次別ページ、サークルページなどを追加する予定です。ホームページもWEB名簿と同様に、平成25年4月に更新する予定です。

の予定です。ホームページは、現在デザインに着手した段階です。ご要望があれば事務局にお知らせいただくとともに、完成した暁には、積極的なご利用とご協力をお願いいたします。

会員寄稿

今ひとたびの京都

岡嶋 達也

(昭61年卒・東京支部)



も東京と大阪の間で転々としてきました。平成22年7月からは、久しぶりに新大阪に所在する支社勤務となり、今年6月まで滋賀県・大阪府エリアを管轄してきました。

洛友会会員の皆さん、大文字山に登ったことがありますか? 何度も登った方も多いと思います。私が、私自身は、京大生には大変身近なこの山に登ったことがあります。二十年以上経過した昨年、初めて登ることになりました。もちろん登山というほど大げさなものではなく、ハイキングのレベルですが。卒業後、鉄道会社に入社してもうすぐ四半世紀、この間の多くを東海道新幹線の電気設備の維持や改良に関わる仕事に従事し、職場

私どもの会社では、歴史や自然に親しむウォーキングをお勧めしながら、あわせて気軽に鉄道をご利用いただくため、駅を起終点とする「さわやかウォーキング」というイベントを毎週末中心に開催し、多くのお客様にご参加いただいています。他の鉄道会社でも同様のイベントは多く、当社でもこれまで、静岡、名古屋エリアの在来線駅で開催してきましたが、昨年からは、遠方から新幹線でおいでいただくことを期待して、京都での「さわやかウォーキング」を始めることになりました。とは言っても、それだけのお客様に来ていただけるかわからない中、多額の経費をかけるわけにもいかず、支社の社員手作りのイベントとして取組んできました。私ども電気設備担当は、このイベントの直接の担当ではありませんが、支社の一員として側面からの支援をしたいということと、仕事柄、職場揃ってどこか遠くに旅行に行くこともできず、こういうイベントなら、さほど金もかからず、時間的拘束も少なく、社員も楽しめる

だろう、何よりも自分が歩いて気分転換したかったこともあり、半ば無理やり有志を募って、毎回参加してきました。

この企画の準備は、実行半年前からいから本格的に始まりましたが、最初にコース設定案を聞いた時は、特に珍しいコースもなく、自分の方がよく知っているぞと思いい、あまり期待していませんでした。そんな感じで半ば仕事の延長線上で参加した「さわやかウォーキング」でしたが、実際歩いてみれば、なかなかどうして、こんなところにこんなものもあったかかと、これまで気付かなかった様々な気付きをさせてもらいました。そのいくつかの体験記です。

○大文字山(平成23年5月)

言うまでもなく、吉田キャンパスで学んだ京大生にとっては、おそらく「常に視界の中にあつた山」だと思えます。複数の登山ルートがあるようですが、銀閣寺の門の左側を回っていくのが最も一般的なルートでしょう。最初はただららとした上り坂が途中から急な山道になり、街歩き用の靴ではさすがに滑ります。最後は急な石段が長く続き、こりやかなわん、もう勘弁してくれと思う頃、すっと視界が開けて火床に到着します。火床からの市内の眺望は絶景で、ここからなじみ深い建物一つ一つを

探すのも楽しみです。

○貴船・鞍馬(平成23年7月)

言うまでもなく「観光地」そのものであり、学生時代にも行ったことがあります。その時は鞍馬寺から貴船神社へ抜けるルート、今回は、貴船神社から鞍馬寺へ抜けるルートです。単に逆コースと思えますが、叡山電車鞍馬駅の標高は2338m、貴船口駅の標高は2038m。絶対に貴船側から登る方がしんどいのです。決して、30年の時間経過による体力低下とは、信じたくありません。川床は横目に見るだけで、ひたすら上り、初夏の山中はさわやかでしたよ。本当に(汗)。それにして暑かったので、打ち上げをしようということになりました



H23.7.9 日わやかウォーキング 貴船 貴船神社と鞍馬山

が、場所を決めておらず、行き当たりばったりで出町王将を占拠、ぬるいビールでの乾杯となったのでした。

○袖子の里水尾・清和天皇陵(平成23年12月)

ここまでは、誰でも知っているスポットばかりでしたが、今回は、もうネタ切れかと思つた地味なコースです。水尾は京都市右京区内ではありますが、何とも静かな山間の集落です。山陰線の保津峡駅から約5km小さい川の谷筋をたどっていく集落で、晩年の清和天皇がいたく気に入られ、崩御まで過ごされたとのこと。陵も集落を見おろす対岸の山の中腹にあります。

水尾は、袖子の産地としても有名な

名とのことで、ちょうどこの季節、たわわに実つた袖子の畑の中を歩いていきます。冬の凜とした空気の中、南向きの日の当たるところがほんわかと暖かく気持ちのいいウォーキングです。清和天皇陵への急な山道への上り下りで心地よく疲れた後、今日のために開いていただいた茶店で飲む柚子湯の味は格別でありました。帰り道は、京都駅まで電車に戻り、今度こそ準備万端の打ち上げ会と相成りました。

以上が、今回の体験のごく一部ですが、京都は、観光地としてあまりにも有名で、全国あるいは海外の多くの人が持っている、有名な神社・仏閣や祇園・先斗町といったようなステレオタイプのイメージができてしまっています。これは、現に京都に住んでいる人も大きく変わるところはないのではないのでしょうか。

二十歳前後の学生時代では、京都は、夏は暑く、冬は寒く住みにくいといった程度のイメージで、本当は何もわかっていなかったのだなと痛感します。また、その程度の京都暮らしで、京都のことは何でも知っていると思最近まで思っていたのを恥ずかしく思います。

日々の仕事に追われ、住むところも転々とし、何より頭も身体も「経年劣化」した今、「金閣寺に行った」、「清水寺に行った」という形態の旅行から解放され、何となく気持ちのよさそうなおとろしをとかく歩いてみて、そのあるがままを感じることで、新たな京都の魅力を知ることは、精神にも身体にも大変いい影響があるように思います。

京都通を自認する会員の皆さん、少し肩の力を抜いて、とにかく歩いてみませんか。できれば「さわやかウォーキング」も活用して・・・宣伝になりました。

これまでの仕事を通して感じたこと

金谷 賢一 (平19年院卒・北陸支部)



今回、洛友会会報への寄稿の依頼を受け、趣味の旅行やお酒、最近健康のために始めた自転車通勤のことなど、何について書くかわからないと考えておりましたが、やはり社会人になってから一番多くの時間を費やしている仕事について私を感じてきたことを書かせていただくと思います。私が大学院を修了し、地元北陸の電力会社に就職してから5年半が経ちました。私は入社以来「配電」という職種に就いています。ご存じの方も多いと思われませんが、発電所で作られた電気を、お客様のもとへお届けするのが配電

の仕事です。

入社後の2年間は、保守担当という部署に配属になり、配電設備の保守業務に携わってきました。ここでは、電柱や電線、変圧器などの配電設備を定期的に巡視・点検したり、お客様から電気設備の故障の申し出があれば、現場に出向し復旧作業を行ったりしました。その後の約半年間は、工事技能教育を受けるための部署に配属になり、施工者の方から工事技能の指導を受け、毎日電柱に昇って配電設備の新設や改修の作業を行いました。そして現在は、設計担当という部署で配電設備の工事設計をしています。ここでは、老朽化した設備を更新する設計をしたり、お客様からの電気供給の申し込みに対する設備形成の設計をしたりしています。

ここまでは、現在までの仕事の経歴について簡単に触れましたが、実は私は、学部時代は理学部の物理学科に所属し、大学院ではエネルギー科学研究科で燃料電池の研究に携わっていたという、洛友会としてはいささか異色の経歴を持っておりまして、電気といえは電磁気学と電気化学くらいしか学んだことのないままに電力会社に就職しました。そのため、正直、会社に入るまでは電力会社の仕事とはどんなものか具体的なイメージ

も湧きませんでしたし、まさか自分が電柱に昇って仕事をやるようになるとは想像もしていませんでした。また、配電の仕事はかなり体力を使う仕事が多く(配電に限ったことではないかもしれませんが)、暑い夏の最中、山の中を電線にかかりそうな蔓を伐採しながら歩いたり、冬の大雪が降った後には、まだ誰も通ってない山道をかんじきを履いて歩いて巡視したりと、これまでどちらかといえば文化系だった自分にはあまり経験したことのない苦労を経験しました。入社後数年間は、メーカーに就職したり、公務員になった同級生と、たまにお酒を飲みながら話をしている、周りの人たちの仕事と自分の仕事との間にギャップがありすぎて、違和感を感じることも多々ありました。

それでも、電気が点かないお客様のところに行き、電柱に昇って復旧作業を行い、電気が点いたときに「ありがとう」と言われると嬉しくなりましたし、電気の供給のために新規に電柱を建てなければならぬときに、苦勞して用地交渉をしてお客様の土地に電柱をお願いし、自分が設計した設備が現場に出来上がったのを見たときには大きなやりがいと達成感を感じました。

仕事を続けているうちに、自分

はもともと電気が専門ではなかったからとか、体力に自信がないからといって、できない理由を探すのではなく、電気についての知識が少ないうえに資格の勉強を兼ねてもう一度勉強し直そう、仕事をしながら体力作りができるのはむしろ一石二鳥というふうには、できる方法を探し、なるべくプラス思考で物事を考えられるようになりました。当然その方が仕事の効率も上がりますし、何より仕事そのものを楽にするようになる気がします。

昨年の東日本大震災を機に電力業界を取り巻く環境は大きく変わってきています。世論は脱原発や再生可能エネルギーの普及拡大を支持し、発送電分離や電力自由化など国のエネルギー政策も見直されてきています。しかし、私たちの生活において電気は必要不可欠なものであり、お客様のもとへ直接電気をお届けする私たち配電部門の役割と使命は今後も変わることがないものと信じています。今はその現場で働くものとして、その役割の一端を担っているという誇りと自信を持って自分の仕事に取り組みたいと思っています。



エレクトロニクス産業の底力とアキバ文化

平井 淳生

(平2年卒・九州支部)



ました。多くの装置・設備は倒壊、クリンルームの天井ユニットは落下し、電線類も垂れ下がっている状況。クリンルームの壁は崩れ、一部の天井がひび割れてブルーシートで雨露を塞ぐ有様。屋外でも、ダクト類の多くが割れ、配管から酸性・腐食性の強い薬液がこぼれ出したために多くのバルブが溶け落ちているといった状況でした。

昨年3月の東日本大震災では、半導体工場をはじめ、日本経済を支えるエレクトロニクス産業にも大きな被害がありました。本会の会員やその関係者にも被害に遭われた方がいらつしやると思いますが、心よりお見舞い申し上げます。

私は震災発生当時、経済産業省の情報経済企画調整官としてIT産業の担当をしていました。地震から数日が経ち、被害の全体が明らかになるに従って、日本経済のサプライチェーンが非常に大きなダメージを受けていることが分かってきました。その中でも、北関東にある半導体工場の被災・操業停止の影響は甚大で、家電製品や自動車をはじめ様々な製品に不可欠のマイクロコンピュータの供給がストップしてしまいました。実際に現場に駆けつけて見ると、その被害の大きさに息を飲み

この工場の復旧に、自動車産業や電機メーカー等からピーク時には二千五百人もの応援が駆け付け、二十四時間体制で懸命の作業にあたりました。その手順は、バラバラの企業から集まった急拵えのチームとは思えない、実に鮮やかなものでした。また、ある若手エンジニアは、誰から指示を受けたのではなく自らの判断で、再開後の歩留まりを少しでも上げるために修復中のクリンルームにビニールのエアカーテンを張って回っていました。このようなチームワークと一人一人のモチベーションの高さが、エレクトロニクス産業をはじめ日本のものづくり力の強さだと思えます。

結果、わずか二ヶ月後には生産再開に漕ぎ着けることが出来、様々なユーザー産業での挽回生産がはじまったことはご承知の通りです。

さて、最近、その日本のエレクトロニクス産業が苦境にありま
す。震災対応が一段落した昨年七
月に人事異動で九州に赴任してき
ましたが、それからの一年間だけ
でも、九州から大手4社の工場縮
小・撤退計画がアナウンスされま
した。かつてのシリコンアイラン
ド九州にも半導体産業の再編の波
は確実に押し寄せています。

震災復旧で發揮されたように、
強いものづくり力を持つ日本のエ
レクトロニクス産業ですが、残念
ながら、ビジネスとしての競争力
には翳りが見られます。その要因
として、急激な円高や高い法人税、
通商交渉の遅れなど五重苦・六重
苦と言われるような日本の厳しい
経営環境があることが指摘されて
います。が、ここでは別の視点か
ら思うところを書き綴りたいと思
います。

かつて家電・電子部品の街で
あった秋葉原は、今やアニメやサ
ブカルチャーの街として大きく変
貌を遂げています。以前パソコン
大型店であったビルは漫画・アニ
メグッズの店舗に生まれ変わり、
大型家電店を改装したビルの八階
では人気アイドルグループAKB
48が連日公演を開催しています。
もちろん今でも電子パーツや無線
機器の専門店も軒を連ね、その雑
多で混沌とした町並みが却って多

くの人を惹きつけて止みません。
アニメ・漫画・ゲームなどのア
キバ文化は、今では世界中からも
大きな注目を浴びています。国も、
これら日本発のコンテンツをク
ール・ジャパンと呼んで海外展開を
支援しています。

今年はオリンピック年であるに
も関わらず、テレビ受像機の売り
上げが低調で、エレクトロニクス
各社の業績は下方修正が相次いで
います。しかしながら、冷静に考
えてみれば、テレビ受像機やパソ
コンは単なるスクリーンでしかあ
りません。多くの消費者にとつて、
スクリーンよりもそこに映し出さ
れるコンテンツ（情報の内容）の
方がずっと関心が高いのは当然で
しょう。家電・電子部品の街であ
った秋葉原が文化の発信拠点とし
て変貌を遂げたことは、それを暗喩
しているように思います。

私自身、以前に官民人事交流の
一環としてアニメ制作会社に出向
したことがあります。そこでの勤
務を通じて、日本はものづくり力
だけではなく、映像作品を生み出
し世界中の子どもたちやファンを
惹きつけるクリエイティブ力にお
いても傑出していると確信しまし
た。残念なのは、エレクトロニク
スをはじめとするものづくり産業
とクリエイティブ産業の交流・連
携があまりないという点です。

やや余談になりますが、アキバ
文化の一つのムーブメントとし
て、ボーカロイド（歌声合成技術
とキャラクターの融合コンテンツ）
が挙げられます。昨年の本会東京
支部総会で、松重先生がボーカロ
イドの演奏を御披露され、また、
その技術開発にも本会会員の方が
中心的役割を果たされたこと聞きま
した。松重先生のご慧眼に感服す
るとともに、本会会員の本分野で
の御活躍をととても喜ばしく思いま
す。

強いものづくり力とアキバ文化
に代表されるようなクール・ジャ
パンが融合すれば、日本のエレク
トロニクス産業がその栄光を取り
戻すことが出来ると確信していま
す。

トカラの旅

松本 壯夫

(昭43年卒・東京支部)

今年3月、1か月掛けて念願の
トカラ列島の旅をしてきました。
私は昭和50年3月から2年間鹿児
島で電気通信の業務に従事してい
ました。当時電話の自動化計画が
推進中で、そこで初めて文明から
隔離されていたトカラを知りまし
た。しかし残念ながら業務でトカ
ラに行く前に転勤になったため、
機会を逃し、以来35年間行きたい

と思いつけて来ました。
トカラとは

トカラ列島は正式には十島村と
言い、屋久島と奄美大島の間にあ
る火山列島です。有人の島が北か
ら口之島、中之島、平島、諏訪之
瀬島、悪石島、小宝島、宝島、そ
れに無人の5島を加え12島からな
る村です。最後の秘境と言われ、
自然のままに自然が残り、各島に
は平家の落人伝説と平家にまつわ
る史跡があります。島の人口は60
名前後、多い島でも140名程度
で、基本的には自給自足の生活で
す。唯一の交通手段の村営船「フェ
リーとしま」が鹿児島から週2回
有人7島を往復しますが、運航は
天候次第です。各島にある民宿は
1泊3食付の事前予約制、公共交
通機関は自分の足のみ、食堂や土
産物店は無く、観光客は多くはあ
りません。

事前に集めた情報をもとにプラ
ンを練りました。船便の関係で各
島少なくとも3泊と、時間はあり
ます。「地図にある島内の道は全
て歩き、島の人と話をし、登れる
山は全て登って、体で島を知ろう」
を念頭に行動しました。一方では
自然の中何でも考えず、のんびり
したいなとも思っていました。

3月19日夜11時50分、鹿児島港
を出港した「フェリーとしま」が、
宝島に着いたのは翌日の昼1時頃

でした。ここから私の7島巡りが
始まりました。

時期が丁度学校の先生の異動時
期と重なったため、幾つかの港で
先生の見送り会に遭遇しました。
生徒、先生、父兄が参加して、島
を挙げての式典です。見送る島民
と見送られる先生を繋ぐ色とりど
りの紙テープが出港とともに空に
舞い、生徒は高い崖壁を走り、手
を振り、旗を振る。旅の序盤から
何とも言えない離島の切なさ、人
情を感じる一幕でした。

自然の作った景観



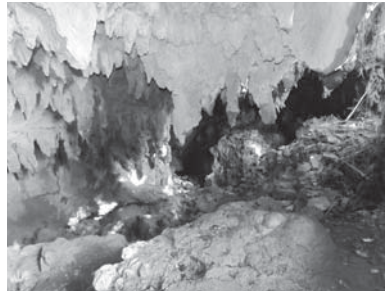
平島の甌穴

島の殆どが断崖絶壁で囲まれて
いて樹木は少なく、琉球竹で覆わ
れています。長年かけて自然が作
り出した印象的な景観は多々あり
ますが、特に印象深いのは平島の
甌穴と小宝島の奇岩です。

平島の甌穴は長い年月をかけて
小石が満潮時の早い潮の流れで窪
みの岩を砕き、丸く大きくした潮
溜まりで、中には砕かれた岩が丸

くなくなって残っています。青空と雲が映え、とても美しかったです。小宝島では島中央の竹の山を囲む一周道路を歩くと林立する奇岩に出会います。海岸にも立神と言われる奇岩が多く聳え立っています。何とも奇妙な、自然だけが作られる形で、海や照りつける太陽とよく調和していました。

宝島の思い出



宝島最大の鍾乳洞 (観音洞)

宝島のキャブテンキッドの財宝伝説がある鍾乳洞、観音洞は島内最大の拝所で、入口を入ると狭い広場に観音様などが祀られています。洞窟内は薄暗く、天井一面から尖った鍾乳石が垂れ下がり、奥には奥行500mとも言われる暗い穴が口を開けています。何とも不気味で、しかもトカラハブがいるとの話もあり、一人で奥に入るのは断念せざるを得ませんでした。また、ほぼ全島民が参加する小中学校の卒業式に飛び入り参加しました。生徒数僅か9名、うち卒

業生は2名で、卒業生が担任の先生の先導で入場することから始まり、式次第に従って盛大に、厳かに行われました。思わず南米の日本人学校での息子の卒業式を思い出し、感激しました。

も遭遇しました。路上で悠然と草を食み、通してくれず、30分も待たされました。直ぐに居住地を出られると思っていましたが、10kmも歩く羽目になり、やっと2時頃に境界の柵を越え、お弁当を食べることができました。

山頂からの眺め
7島の登れる高い山は殆ど登りました。悪石島では快晴の下、584mの御岳に登りました。頂上からは平島、臥蛇島、小臥蛇島、諏訪之瀬島、更には中之島の一部が見え、反対側には宝島、小宝島が見え、その素晴らしさを独り占めし、満喫しました。

今回の旅では、4島で船便の欠航・延期にあい、予定通りには行きませんでした。自然豊かで、人情も豊か、自然が支配する生活、トカラはまさしく秘境です。進み続ける文明社会を一時離れてみると人生観が変わるかも知れませんが、私自身、来年もまた行きたいと思っていますが、皆さんにもトカラを訪れる機会があることを願ってやみません。

諏訪之瀬島では煙を吐く御岳799mに登りました。溶岩原を過ぎて溶岩の山の稜線を行くと御岳の旧火口に着きましたが、それより先は立ち入り禁止です。途中振り返って見た景色は「魔女の宅急便」で魔女のキキが箒に乗って空から眺めていた景色のように、半島を一望できてとても素晴らしかったです。

もっとと会合に出ましよう
岩壇弘三 (昭28年旧制卒)

訪れた温泉では

口之島では野生牛の居住地内にあるセラナム温泉へ行きました。宿の女将さんが途中で車で送って下さり、昼食にお弁当と水を持たせてくれました。無事温泉に着き、一人悠々と露天風呂を楽しみました。帰路では至る所に牛糞が散在しており、野生の牛に二度



(昭28年旧制卒)

洛友会には多彩な行事を企画して頂いて感謝しています。私は東京支部に属していますが、特に秋の特別講演会は、幹事の努力で素

晴らしい講師を選んで頂いたり、春の見学会も通常は入れない貴重な施設を訪問させて頂けるので、関係者に感謝しています。このような機会には同級生も出席して再会を喜べるだろうと期待して参加するのですが、決まってJ.R出身の友人しかいなくて寂しい思いをしています。

ティーを開き、9月には1泊以上の旅行をします。その他の月には銀座のビアホールで例会を開き、会員が30分余りのスピーチをし、その後に飲食をします(会費3000円です)。会員は元、代議士、大学学長、東大医学部教授、高級官僚、銀行家などと多彩で、多様な話しが聞けます。私も「古き良きカンボジア」「イスラエル事情」「今の日本を15年前に予測できた」「中国高速鉄道計画」など何回か発表しました。

その遠因を考えてみました。実は私は旧制高校最後の卒業生で、かつて学生会館へ行くと、XX高校三水会、YY高校二十日会などと多数の高校の会合案内が掲示されていました。私の高校も22年卒以降の三水会と、それ以前5年間の十八日会が現存しています。後者は私たちより真面目で霞ヶ関ビル35階の東海クラブでアルコール抜きの昼食後、昔はノーベル賞受賞者、100歳で活躍中の著名な医師、元大使など会員や同窓のみが話したのが

そこで気の付いたことがあります。工学部出身は会員としての数は多いのですが、出席率が極めて低いのです。要するに、私のようなNTTやJ.R出身の間は、日常から多様な人に接し、パーティーにも度々出席してきたので、どのような人とも会話ができるのに対して、工場勤務だった人は機械に接することを主体としてきたので、知らない人間に接することが苦手であることです。多様な人生を送る幸福にも気が付いて欲しいと願っています。

今は会員の年齢が90歳前後になったので、元宮内庁長官、歌人など多彩な人を外部から依頼して1時間余り話しを聞きます。私は毎月約70枚の往復葉書や資料の印刷で協力し、適宜出席しています。私は会員約100名の三水会の世話役を約10年続けています。12月と7月はNHKにも毎月出演するアコーディオン奏者と夫人の歌手を招いて寮歌や歌曲を歌うパー

私の高校クラスからは、医学部と工学部へほぼ同数進学し、私もどちらにするか最後まで迷いました。そのようなことから最近「医学部と工学部」というエッセイを書いてみました。前者は農業、小売業などと同様に体力に応じた生

物に相応しい一生を送るのに対して、後者は非人間的な定年があり、突如として生活方式を強制的に変えさせられ、日本では長命するほど生活費がインフレのために厳しくなります。従って老人となった工学部卒が経済的に不利となるので会合への出席も断念することになるでしょう。工学部卒に自然体で人生を送れる社会にしないとしないと、私はエッセーで強調しました。しかし社会の変化には長い時間を要します。同窓生の皆様も、もっと会合に出席するよう努力して頂き、さまざまな形で社会との接点を持ち、それを楽しんでいただくことを希望します。

名刺

札拔 宣夫

(昭53年卒)



最近、私のこれまでの人生において、画期的なことに気づいた。この3年近くの間、自分の名刺を変えていないのである。

学校を修了してすぐに入社した会社では、頻繁に組織変更があっ

た。ヒラの間にも、実質的に所属が変わったわけでもないのに、組織名称が変わると新しい名刺をいただいた。その後も異動や昇進の度に、多いときには年に数回、新しい名刺を作った。当然、使いきれない場合もあり、無駄なことをしていたものだと思う。その一方、新しい名刺で心機一転することもある。肩書が変わることにワクワクもしたものである。

50歳になったのを契機に、ベンチャーの起業に参加した。折悪しく1年半でリーマンショックに見舞われ、残念ながら事業を中途で譲渡するはめになった。それとともに今の会社に移ったのが3年前。それ以来、肩書を変えていない。ゆえに名刺も変わっていない。

私の名刺の話と直接関係はないのだが、名刺について考えてみた。そもそも名刺は、渡す相手に、まず自分の名前を覚えてもらうためのものである。その肩書は、本来は、それを持つ人の権限を表す。そのため、所属組織や役職など、権限の範囲が変われば、名刺を新しくすることは重要である。使いきれない名刺が残ってしまうのは、必要悪だとも言える。ところがこの肩書が厄介者だと思う。

昔話だが、アメリカの従業員数人というベンチャー企業の社長が、私のいた従業員数万人の大企

業の社長に会いたいと言ってきたことがある。社長対社長だから対等だと言うのだ。窓口の担当は苦笑して、その案件での決裁権限を誰が持っているかを伝え、丁寧に引き取り願ったことを覚えている。

また、日本からアメリカに出張した部長さんは、名刺の英語肩書として「General Manager」と書いていた。業務交渉の中で彼は、相手の些細な要求に対して「本社と相談して回答する」と答え、相手の失笑を買った。「General Manager」ならば、交渉における決裁権限を持つっていると解釈されたからである。名刺の肩書の適切な表記は、かように難しいものだ。

最近の日本では、組織のピラミッド構造が維持できないので、専門職等で従業員を処遇する。そのため意味不明な肩書が氾濫している。肩書を英語にして、それをカタカナで書くような会社も増えている。まあ、英語の方が、すこしはその人の権限をわかりやすくするという気はするが、組織名までカタカナ英語で書かれると、やたらと長いタイトルは読みづらい。ともあれ、権限のよくわからない肩書では、本来の名刺の意味が失われているように思う。

初めて名刺を渡された人は、その相手を知らない以上、どうして

も相手を肩書からステレオタイプで見てしまいがちである。役員さんだから偉い、あの会社の人だから信用できる、というような調子だ。またコーポレート・アイデンティティーの見地から、名刺のデザインにも会社のイメージやポリシーを出すことが普通になった。今や、白黒の文字だけが並んだ名刺の方が珍しい。名刺のデザインから受けるイメージが、相手の第一印象に与える影響も無視できない。

ところが名刺は、決してそれを持つ人の人となりを表すものではない。名刺を受け取る人も渡す人も、それを勘違いしている場合が見受けられる。名刺は不思議な力を持っている。

偉い肩書を持てば、相手はそれなりの敬意を払ってくれる。悪しき習慣だと思うが、肩書のお陰で接待されることも多いのではないか。そうすると、その人は自分が本当に偉大な人物なのだと思います。むしろ、実は肩書のお陰だとしても、である。

知人から伺った話だが、営業で出入りしていた会社を引退なさった元役員は、いまだにかつてと同じように命令口調で接して来られるという。これは、人間関係が個人対個人である前に、組織対組織の関係に引きずられている一例

だと思う。また、会社を定年で辞めた途端に、何もすることがなくなったと言う人も少なくない。日本の弱さとして、海外で一人でも活躍できるような人材がなかなか育たないという問題が指摘されている。上記のエピソードのように、個人ではなく組織の力に依存した人間関係、またそれを育む日本の社会風土にも原因の一端があるように思う。

結局のところ、プライベートシーンを除くと、我々は個人として人と接する機会が少ないのだろう。特に、学校を出てすぐに大企業に就職し、主に社内業務しか経験していない人はなおさらだ。社内か、せいぜい取引先や同業者の狭い範囲だけの人脈しかできない。

海外の、転職が当たり前の社会では、会社のような組織としての垣根が低い。そういう中にもムラ社会は存在する。たとえばマネージャーが転職すると、その数カ月後に元の部下がぞろぞろとマネージャーの下に転職する、というような話はよくある。ただ、それは、そのマネージャーも部下も、お互いに個人としての相手を評価して、あの人と一緒に仕事したいという関係で繋がっている。彼らは、仮にライバル会社間でも、そういう個人関係を

重視するし、その維持に気を遣う。頻繁に他社の知人と昼食を共にし、意見交換をしたりもする。

私は営業でもなかったが、幸いなことに、若い間にも社外に出していただく機会が多かった。おかげで社外の多くの知人に恵まれた。独立してからも、そういう方々に助けていただきながら、なんとか今日までやってきた。私はその経験から、日本でも組織関係より個人関係を深めて行くべきだと思っ

ている。しかし、若い人たちはともかく、ある程度年配の、純粹培養的会社人間たる多くのオジサンたちに、今さら会社の枠から飛び出せというのは難しい。最近SNSで個人の考えや嗜好を見せる人が増えてきた。ただ、積極的に使える人は、まだ少数派だろう。かく言う私も、情報発信の方はさっぱりだ。しかし、学生の採用選考にもSNSが使われる中、まだ現役のオジサンたちにも個人をアピールする手立てにはなるように思う。

東大の柳川範之先生(経済学)が、40歳定年制を提唱しておられる。国のフロンティア構想に盛り込まれたアイデアである。リストラに怯えながらも、一生を同じ会社で過ごすのか。そういう疑問から、人生を見直して再出発の機会を促し、社会の硬直性を解きほぐ

す狙いだと理解している。そういう荒療治が必要かもしれない。いずれSNSが名刺代わりになるかもしれない。それでも私は、まず名前を覚えてもらうという名刺の効用を認めている。しかし、特に若い年代の人たちには言いにくい。肩書で仕事をするのはなく、個人としての人間関係を築いて仕事をしたい。それが、日本の発展のひとつの手段になることを信じている。

同窓会だより

昭和30年卒クラス会開催の記

2年前に55周年クラス会を関東さいたま市で開催したときの結論は、そろそろ5年毎の開催は難しくなりそうなので、殆どの方が傘寿を迎える3年以内に京都で開催して、定例のクラス会に区切りをつけてはどうかということ、関西に幹事がまわってきた。

我々の入学時は教養課程1年目を宇治分校で学んだので、関西でやるならその後すっかり変わった京大宇治キャンパスの見学をいれてはとの西川さんの提案があり、それなら宇治分校1年間で終了した1952年の60周年日に当る平成24年度に開催するべしというこ

とで急遽関西の幹事団が結成され、本年6月1日に実施の運びとなった(遠方のクラスメートは一泊)。

宇治キャンパスを殆ど満杯にしている研究所群の中で、特に電気系を発祥としているエネルギー理工学研究所のヘリオトロンJ、および生存圏研究所の太陽光発電衛星プロジェクト用の超大型電波暗室という、共に将来の夢の実現に向けて活躍している2箇所を見学した。見学者は一同感嘆しきりであった。

この日の行程は、JR六地蔵駅に集合、そこから宇治キャンパス、キャンパス内の移動、そして宴会場までとチャーターバスを活用した。クラス会は、平等院のそば宇治川畔の「花やしき浮舟園」で行った。われわれの学年は入学時59名、卒業時61名であったが、今回の参加者はその50%を越える31名のクラスメートと奥様1名の32名が集まった。

最高齢の90歳を迎えられたお元氣な竹田正美さん、カナダトロントから参加の飯塚啓吾さん、仙台より安藤孝野さん、広島から秦祐夫さんなど、平均年齢80歳とは思えない元氣な人ばかりであった。いつまでも懐かしい話題が尽きなかったが、最後に琵琶湖周航の歌を合唱して思い出多いこの会を閉

会した。

追記 クラス会終了後、当日参加者が撮影した静止画、福川さん撮影の動画を泰さんが集めてネット上に共有アルバムを作成して下さった。それらに加えて、過去5年毎の全クラス会の記念写真、入学時以来の古い写真、恩師の先生方などなど大変懐かしい写真がごんどん提供され、クラスメートがこれらをネット上で共有できることとなり、今回のクラス会の余韻がいつまでも続くこととなった。

(西川禪一、木村隆次、福川幸勇、葉原耕平の各氏等との一致協力による企画グループを代表して木村磐根記)



京大電氣57周年クラス会 2012.06.01 宇治花やしき浮舟園

花やしきでの記念撮影

支部だより

北海道支部総会報告

去る6月30日(土) 18時30分より札幌市内の全日空ホテルにて平成23年度北海道支部総会を開催した。

今回も定年と同様の7名の出席者となり、アットホームな中で開催となった。

最初に、中山支部長よりご挨拶ならびに洛友会役員会の報告等をいただいた。大学の状況も年々変化しており、新卒者の新入会員も少なく、近年の状況を知ることもし難いことから、次回には本部からご参加いただくことを検討することとした。

続いて幹事より前年度会計報告、今年度予算案をご説明し、承認いただいた。

この後、中山支部長のご発声により、懇親会に移り恒例に従い会員の近況報告を中心に話題を進めた。北海道は京都から遠距離ということもあり、桂キャンパスを訪問したことがない会員も多く、一度見てみたいとの話にもなったが、なかなか難しそうです。

このように懇談を進める中、予定していた二時間はすぐに経過し、次回の再会を願いながら、記

念写真撮影後お開きとした。

木元伸一(平元年卒)記



中部支部総会報告

平成24年6月16日(土)名鉄グランドホテルにて、24年度洛友会中部支部総会が開催されました。来賓として本部からは幹事長に就任された荒木光彦先生、教室からは守倉正博先生にお越しいただきました。会員参加者は全28名で、支部への新卒会員3名を含み若手会員に多数出席いただき、活気のある盛大な会となりました。

総会は松浦幹事司会のもと、根石支部長からの開会挨拶で始まり、その後23年度の事業報告・決算、24年度の事業計画・予算案を安藤幹事より提案し、全会一致で承認されました。また支部総会への出席会費を、若手会員の出席促

進のために卒業5年目までの初参加者は無料または半額とする優遇制度も決定されました。その後来賓の両先生から洛友会と教室の近況報告をしていただきました。

荒木先生からは洛友会活動の近況報告をしていただき、24年度の事業として「創立60周年記念会報」、「名簿の電子化」などについてお聞きしました。また、現役学生への支援活動として、「歓迎会」、「サマーキャンプ」、「企業交流会」などの諸活動が紹介され、洛友会がOBだけでなく、現役学生のためのものであることを皆強く実感しました。

守倉先生からは、教室の近況とともに先生ご自身の研究活動のご紹介があり、今では普通になりつつある無線通信・無線LANの研究に早期から携わってこられた話をして頂きました。特に急速な携帯電話の普及により、実質全世界の6〜7割程度の人が普通に携帯電話を使用しているという現実も教えていただき、私自身ひどく驚いた次第です。

総会の後は、恒例の写真撮影・懇親会と場は進みました。酒井副会長の乾杯で始まった懇親会は、若手会員から順次自己紹介・近況報告などをしていただき、おいしい食事とアルコールの手伝いもあり、終始賑やかで笑いの溢れる場

となりました。最後まで恒例により石川進大先輩主導の下、「道遥の歌」を全員で合唱したのですが、今年はなんと11番まで全曲歌い、今後の会の発展を祈念しながら散会となりました。

加藤 徹(昭58年卒)記



東京支部総会報告

平成23年6月24日(日)、学士会館にて東京支部の総会、講演会及び懇親会を開催しました。本部より3名(長尾会長、木村前幹事長、高橋事務局長)の来賓をお招きし、58名(うち支部会員55名)の参加をいただき、例年どおりの盛会となりました。

支部総会は的場総務幹事の司会により、午後2時に塩見支部長に

よる挨拶で始まりました。塩見支部長からは、東日本大震災、津波、竜巻など災害も多くなっている。大変な世の中になってきている。こういう世の中だからこそ、元氣な熟年世代、会社の中心でなかなか出席が難しい壮年世代、卒業して10年以内の若手世代の交流が重要であり、この洛友会がそのような場として発展してければとのお話がありました。

その後、来賓の長尾会長よりご挨拶をいただきました。5年間の国会図書館長としての役目を3月30日の衆参本会議で終え、ゴルフにいそしんでおられる旨、今後は、OBの知を集め、社会の役に立つよう貢献していきたいとの旨、そして、20年間の長きにわたり幹事長として洛友会活動を支えていただいた木村前幹事長への感謝の意を表され、木村先生にもご挨拶いただくよう促されました。

これを受けて、木村前幹事長からのご挨拶があり、10年若返って幹事長職を荒木光彦幹事長にバトンタッチしたこと、在任20年間のうち近年の10年間は洛友会活動の改革に取り組んで、すべてが片付き順調に進んでいること、施策推進にあたっての各支部の皆様協力に対する感謝の意を表されました。会場のわれわれは、20年にわたる幹事長職の遂行に対する感謝

の気持ちを込めて拍手をお送りしました。



長尾会長



木村前幹事長

続いて、的場総務幹事より平成23年度行事・活動報告「第一号議案」があり、支部総会の講演会では松本総長、秋の講演会では、スーパーコンピュータ「京」の開発に携わられた理化学研究所次世代スーパーコンピュータ開発実施本部の渡辺貞様をお招きし、共に大盛況であったこと、また、昨年中止になった見学会についても、宇

宙航空研究開発機構(ＪＡＸＡ)調布航空宇宙センターにて、盛況のうちに開催できたこと、2月の若手勉強会では、「ヒトと機械を脳・神経のレベルでつなぐ神経インターフェース」と題して、東京工業大学理工学研究科の八木透准教授から貴重な講演をいただいたこと、の紹介がありました。また趣味の会、拡大クラス会の状況について報告があり、承認されました。

続けて、平成23年度決算報告および監査報告「第二号議案」があり、ほぼ予算計画通りの決算となったことが説明されました。この決算内容に対し、遊佐監事からは問題なしとの監査報告が行われ、決算報告および監査報告は無事承認となりました。

引き続き平成24年度の役員／評議員／幹事「第三号議案」の提案が行われ、拍手をもって承認されました。平成24年度の新役員は、支部長 小澤秀司(S46卒)、副支部長 遊佐洋(S47卒)、監事 安田豊(S48卒)、総務幹事 松野知愛(H5卒)、会計幹事 松村善洋(H6卒)、庶務幹事 大畑雄司(H5卒)、若手勉強会幹事 的場直人(H4卒)の7名となりました。

続いて退任される塩見前支部長より、

この洛友会東京支部の活動は、会に出席頂く熟年で元気な会員と、実務を担う、会計、総務、庶務の各幹事のおかげで運営できており、見学先、講師のお願いは、OBの皆様への人的ネットワークでできている。皆様の支援により無事、1年間の支部長をやってこられたことに対するお礼を申し上げます、とのご挨拶がありました。

ここで、引き続き小澤新支部長より就任のご挨拶をいただきました。小澤支部長からは、まず、新役員の方々と一生懸命皆さんの交流に努力していくのでよろしくお願いたいと、ご挨拶がありました。そして、今後の運営方針として、

1. 絆を作っていくことに役に立っていききたい。人と人のつながり、家族、近所つながり、と、いろいろなつながりがあるが、洛友会東京支部は世代間を乗り越えるつながりを作れる可能性のある会であり、そのためには若手に関心をもっていただくことが必要で、若手に参加いただくことを東京支部活動の重点課題にした

い、

2. 皆様に「よかった」と言って帰って頂ける企画を考えたい。今後、講演会、旅行会を開催していくことになるが、皆様の関心は政治、技術、等、いろいろであるが、開催時期も考慮して、そのタイミングで一番ふさわしいイベントにしていきたい。そのためには会員の皆様のご協力、ご支援が大切なので、イベントの企画段階からのご協力をひとつよろしくお願いたい、とのお話がありました。

次に、的場新若手勉強会幹事から、平成24年度行事・活動計画「第四号議案」について説明を行いました。質疑応答のひとつとして、会場より、若手ばかりでなく古手?の活動に対する支援も必要ではという意見をいただき、小澤新支部長より、そのような意見も一部に頂いていることを認識しており、今後の運営の参考にさせていただきます。その後、第四号議案は拍手をもって承認されました。次に平成24年度予算計画「第五号議案」が説明され、拍手をもって承認されました。そして、平成24年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿



塩見前支部長



小澤新支部長

1名、喜寿1名)への祝辞が述べられるとともに、会場より拍手を持って祝意を表しました。その後、洛友会本部から、高橋事務局長より、大学および、本部の近況についてご報告がありました。

以上をもって、平成24年度洛友会東京支部総会は閉会となりました。引き続き、約10分の休憩時間の

あと、15時より講演会の時間となりました。講演者としては、(株)コミュニティアの横井省吾様に「音楽と私」という演題でお願いしておりましたが、今回の講演会は少し趣向が異なった形で開催されました。まず、最初に、横井様(テノール)と、佐々木京子様(ピアノ)、早稲田桜子様(バイオリン)による、演奏会が始まりました。演目は、前半が慕情(独唱)、O Sole mio、私の太陽(テノール、ピアノ)、ドビッシー 月の光、ショパン 遺作ノクターン、ショパン 幻想即興曲(以上ピアノソロ)、落葉松(テノール、ピアノ)の6曲、小休憩をはさんで、星は光ぬ プッチーニ「トスカ」(テノール、ピアノ)、バッハ シャコンヌ、モンテイチャルダッシュ(以上バイオリンソロ)、魔王 シューベルト(テノール、ピアノ)の4曲と、テノール、ピアノ、バイオリンのアンコールがあり、約1時間半にわたる盛大なリサイタルでした。佐々木様、早稲田様は、世界レベルの演奏家として活躍されている方で、幼少の頃から音楽を続けておられる横井様の歌声とのハーモニーは大変素晴らしく、会場を十分に魅了する演奏で、音楽にそれほど詳しくない私にとっても、大きな感動を得る講演でした。

その後、横井様より、ご講演を頂きました。まず、最初に、本日の演奏会の準備について、ご説明いただきました。事前の依頼を受けてから、出演者、曲目、などを考え、出演交渉を頂いたこと、当日のコンディションを万全にするため、体調管理まですべてを当日に向けて準備されているとのことなど、演奏家のプロとしての心構えをご説明いただきました。また、当日、午前中から会場入りされ、ピアノの調律についても調律師の方に微妙な音の調整をご指示いただいたり、会場の響きなどを計算して、最高の状態に持ってきて頂いたことについて説明があり、そのような様々な配慮の上に、素晴らしい演奏会が準備されていることが分かりました。その後、佐々木様、早稲田様などのプロの演奏家の活動の紹介、音の違いの認識を促す方法として、音の大きさや響き、不協和音と協和音の違いなどを、佐々木様のピアノを用いてわれわれに紹介頂きました。また、音楽を楽しむためには、懐かしい曲、自分の好きな曲から始め、その後、人の好きな曲を、CD、YouTubeなどで聞くことや、楽器をするとよいつの生涯の楽しみ方としてのアドバイスがありました。最後に会場にお越しの音楽実験

に協力していただけると申し出頂いた方々（合唱等の経験者の皆様）に、佐々木様、早稲田様と一緒に、音に関する実験をしていただいたのち、琵琶湖周航の歌、洛友会の歌の歌唱指導をして頂きました。



早稲田様のバイオリン



横井様のテノールと佐々木様のピアノ

午後6時より恒例の懇親会に移りました。小澤新支部長の開会のご挨拶と長尾会長のご乾杯のご発声で始まった懇親会は、S 23卒からH 6卒ま

で、幅広い年齢層にわたる多彩な参加者の交流の場となりました。料理を囲んで会員の方々の活発な意見交換が行われ、また、歌唱指導を受けたばかりの「洛友会の歌」を全員で斉唱するなど、大変和やかな雰囲気となりました。その後、松村新会計幹事の音頭により恒例の「琵琶湖周航の歌」を合唱（今回はピアノとバイオリンの大変豪華な伴奏付き）したのち、最後に遊佐新副支部長の中締めにより午後7時00分に散会となりました。



琵琶湖周航の歌合唱

事務局だより

洛友会60周年記念特集号の
記事募集

特集号編集長 松田晃一

2012年に洛友会は設立60年の節目を迎えます。これを記念して2013年3月発行予定の洛友会報を、60周年記念特集号とします。「これまでの60年」とともに、「これからの60年」にも軸足を置いた編集方針のもと、編集委員会からさまざまな会員に寄稿をお願いしています。さらに、特集号の一部を企画ページとし、より多くの会員の方からの声を伝えるために記事を募集することになりました。

募集する記事…洛友会の最大の財産は「人材」であり、人と人のつながりの場を提供することが洛友会の使命と考えています。読者の参考になる、人材に関連する記事を広く募集します。以下は一例です。

- ・ユニークな活動をされている個人の紹介（他の会員による寄稿も可）
- ・キャリアアップに向けた経験談やご意見
- ・医師・弁護士などキャリア転換

された方の経験談

- ・企業内の洛友会活動の紹介
- ・社会で活躍されている若手会員の紹介
- ・企業から見た望ましい人材

投稿資格…洛友会費を納入されている会員
フォーマット…タイトル、氏名、卒業年、本文（300字以内）
送り先…電子メールでお願いいたします。
erakyu@kuee.kyoto-u.ac.jp

締切…2013年1月31日（木）

なお、応募が多数の場合は、編集委員会で掲載記事を選択させていただきます。

昭和初期の講義ノート

昭和初期の講義ノートが寄贈されました。

ノートを作成された鈴木茂氏（1908-1987）は昭和7年（1932年）に京都帝国大学工学部電気工学科を卒業後、神戸製鋼に勤務されました。

講義ノートは、専門用語はドイツ語で、文章は日本語（漢字とカタカナ）で書かれています。図面もきれいに描かれており、印刷物のコピーや切り抜きなども貼り付けられています。一度とったノ

トをその都度清書した後、整理されたものではないかと思われま
す。当時の授業の様子やひたむきな学習態度がうかがわれます。

興味のある方は、桂キャンパスの電気系図書室（Aクラスター1-207）で閲覧することが可能です。なお、桂キャンパスの入退室カードをお持ちでない方は、予め桂電気系図書室に電話で閲覧申し込みをしてください（075-38312344）。

所蔵されているのは以下のノートです。

1. 電気磁気学 鳥飼教授述
 2. 交流理論 鳥飼教授述
 3. 電気磁気測定法 加藤教授
 4. 数学 松本教授
 5. 力学 玉城教授
 6. 弱電流工学 加藤教授・小船井講師
 7. 電気化学・測量 中澤教授・石黒教授
 8. 電力応用 松田助教授
 9. 電気機器材料 本野教授
 10. 電線路材料 七里講師
 11. 材料強弱学 松村教授
 12. 物理学講義 森助教教授述
- 2と4につきましては、洛友会HP資料庫 (<http://www.rakuyukai.org/shiriyokohim>) にてサンプルファイルをご覧いただけます。

CUE No.28発行のお知らせ

CUE（電気関係教室技術情報誌）No.28が発行されました。目次は以下の通りです。内容は、左記のHPからもダウンロードしてお読みいただけますので、是非ご覧下さい。

<http://www.s-e-e-t.kyoto-u.ac.jp/ja/information/cue/>
また、洛友会HPの資料庫からご覧いただけます。
<http://www.rakuyukai.org>

巻頭言 名誉教授 上田 皖亮

「電気関係教室の皆さんに期待する」

大学の研究・動向

先端電気システム論講座
「パワーエレクトロニクスからパワープロセスングへ」

産業界の技術動向

（株）東芝 研究開発センター
知識メディアラボラトリー
室長 梅木 秀雄

「音声言語処理」

研究室紹介

平成23年度修士論文テーマ紹介
高校生のページ 藤田 静雄
「太陽光発電のいま、そしてこれから」

学生の声 西澤 真

教室通信

野田 進
「グローバルCOE」光・電子理工学教育研究拠点「活動の纏め」

編集後記

訃報

昭20	大月 清一	24・4
昭21	阿部 鐵郎	24・2・20
昭27	永田 信久	23・9
昭41	久米 一郎	24・7・9

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

急に秋の気配が深まり、北の方から紅葉の便りが聞こえる時節になりました。この会報が届いている頃には紅葉が盛りを迎えているかもしれません。今年も四国の会員から匿名にてご寄附を頂きました。心より感謝申し上げます。

本会報の11ページ最下段に掲載されている「昭和初期の講義ノート」は、その後、仲介役の留岡様を介してご遺族からのお便りをいただきました。ノートを書かれた鈴木様は、神戸にお住まいだったようです。鈴木様が出征される折りにノートは実家に疎開したので、戦災からも、阪神淡路大震災からも生き延びることが出来たこととです。ご遺族の言葉を借りると、「数奇な運命を辿ったノート」と言えるかもしれません。このノートは、電気系図書室での今後の利用が少ない場合は、京都大学文書館で収蔵して頂く予定です。

ほかにも、古い資料を寄贈したいとお申し出がある場合に備えて、どのように扱うかを検討しました。①洛友会事務局にご連絡いただいた後ご持参頂く ②洛友会幹事が見分し、電気系教室に有益なものを教室に推薦する ③電気

系教室で最終判断する という手順をとることになりました。大学の限られたスペースの中では精選せざるを得ない事情をご賢察下さい。

キャンパスは1カ月後に始まる11月祭の雰囲気だんだんと濃くなってきました。最近、11月祭とは呼ばずに、November Festival（略称NF）と呼ばれています。編集子は、大学勤務13年目を迎えて、やっとNFが理解できるようになりました。名前は変わっても中身はあまり変わらないようです。

